



軒端の鞆 『絵巻物による日本常民生活絵引』のひとこま

藤原 重雄(東京大学史料編纂所) FUJIWARA Shigeo

『絵巻物による日本常民生活絵引』(以下、平凡社刊の新版を参照。『絵引』と略す)の利点は、特定の関心に沿って、絵から部分を切り取る ことへの思い切りのよさである。部分に名前を付けてゆくことは、絵に表象された世界を分節化して理解することになる。また、画面に対して網羅的というより、典型例を選択的に取りあげ、小テーマに即した解説を見開きで収め、索引による相互連関をはかっている。この点も含め、最近では佐藤健二「図を考える/図で考える 形態資料学と「絵引」」(『文化資源学』1、2003年)にその意義が整理されており、ご一読されたい。

これまで『絵引』は、美術史学から十分に敬意が払われてきたようには見えない。絵画が何らかの事実の再現・反映であって、それを突き詰めようという態度は、いかにも素人的な絵画への接し方に映ったのであろう。確かに素朴な部分理解の積み重ねは、そのまま表象の全体を把握することにはならない。しかし、細部と全体との往還を意識して絵を見ることにより、画面の理解は深まるものと考えられる。『絵引』の名付け・記述には、こんにち修正を加えるべき点もあるのだが、そうした誤りとて、後学には考察の糸口となることも確認しておいてよい。以下ではそうした事例をとりあげる。

拙稿「中世絵画と歴史学」(石上英一編『日本の時代史30 歴史と素材』吉川弘文館、2004年)では、南北朝時代に成立した絵巻『慕帰絵』からいくつかの段をとりあげて、絵画との距離の取り方、ないしは分析の水準を変えながら画面を読んでみた。特に巻5第2段では、『絵引』を基礎として記述した。この段は、主人公の覚如が親鸞聖人の伝記絵巻を制作する話が詞書にあるが、それと直接対応する場面は、画面の奥三分の一程度に描かれる。この段の絵の前三分の二は、京の街路に遊ぶ人・行き交う人を描き、詞書とはあまり関係がない。

絵の最初の部分にあたる町屋には、軒先に白い丸いものが下がっている【図版1】。『絵引』第5巻797「こままわし」では、「鼓、太鼓?」として疑問を残しながら、解説でも「なお簾のまえ、軒下に釣りさげであるのは鼓か太鼓のようなものではないかと思われる。そうしたものを神仏の前にさげ、これをならして拜むことがひろく流行するようになったのは鎌倉末ごろからのようである。」と記述している。浅学にしてこうした歴史的・民俗的事例

を知らないが、他の絵画作品を見ていて、これは蹴鞠に用いる鞆を描いているのだと気がついた。

最初のきっかけは、近世前期の『職人風俗絵巻』(国立歴史民俗博物館蔵。カラー図版は『近世風俗図譜』12・職人、小学館、1983年。サントリー美術館『日本絵画に見る女性の躍動美』2003年にでも展示)の鞆屋の場面で、鞆作りをしている町屋の軒先に下げられた、星型で中央が丸くあいた黒い板状のものであった【図版2】すると上杉本『洛中洛外図屏風』の上京隻第三扇の中ほど、六角堂境内から門外へ出てゆこうとする二人組にも目が留まる【図版3】。法体人物の後ろに従う男が手に持つのは、『慕帰絵』に描かれた鞆と同種である。鞆を多角形の枠にはめて持ち運んでいたのであろう。

そこで蹴鞠関係の故実書を繰ってゆくと、この枠は、「腰夾(こしはさみ)」ないし「鞆夾」と呼ばれていたことが確認できる。蹴鞠の鞆は完全な球形ではなく、円形の革二枚を帯状の革で縫い合わせたもので、やや凹んだ縫い目が一週している。この部分は「腰」と呼ぶにふさわしく、紐を廻したり、枠で挟み込んで固定するのに具合がよい。比較的早い所見として、弘安九年(1286)ごろに書かれた『革匁要略集』(渡辺融・桑山浩然『蹴鞠の研究』東京大学出版会、1994年)に、次のような問答が見える。

問、「腰挿^{ハサミ}二ハサミテ(鞆を)出ス事無之哉、(中略)如何。」示云、「腰夾不出仕者也。彼八只内々置鞆、只八損スル間、ハサミテ懸テ置料物也。然而又、每人持之、執之間、蒔・貝摺・木絵シナトシテ持タル事モ有也。(下略)」

すなわち、腰夾は内々に鞆が痛まないように懸けて置くためのものである。しかし、蒔絵や螺鈿・木絵などの装飾を施したものを、多くの人が持ちたがるという。実際、『蹴鞠』(大日本蹴鞠会、1938年)という図録に掲載された「鞆夾」は、比較的新しいものと思しいが、八角形(各辺は内側に弧を描く)で文様が施されており、鞆を挟んだうえ、飾り紐が下がる。

近世初頭の伝授書『松下十巻抄』(『続群書類従』一九中)には、「鞆はさみの事、こしはさみと云なり。」とあり、「こしはさみは内儀のものなるほどに」、「こしはさみは大方略儀也、鞆をそんさ〔せ〕じがためなり。」といった性格づけが示されている。同書には枠の大きさも書い

てあり、『蹴鞠百首和歌』（同前）の末尾にも後補と思しき挿図が付加されている。ちなみに「鞠挟」は、『日葡辞書』に、「籐あるいは籐に類したもので作った弓の一種で、日本の鞠をはさんでつるしておくためのもの」（邦訳）と載る。

『慕帰絵』より先行する腰夾の絵画史料として、『伊勢新名所絵歌合』上巻に描かれた事例がある。『伊勢新名所絵歌合』は『絵引』にも採られているが、原本が現存するのは下巻の一部で、上巻は近世の模本でしか伝わらず、『日本絵巻物全集』・『日本絵巻大成』にも参考図版として掲載されるが、参照されることが少ない。歌合発起者とおぼしき法体人物の邸宅で、庭には懸りの木四本の植えられた鞠場があり、中門廊の軒先に腰夾に挟んだ鞠と柳の枝が描かれている。この枝は、鞠を鞠場へ持ち運びする際の道具でもある。この事例では、周囲の環境から、見てすぐに鞠と分る。

なぜ鞠は軒端に懸けられているのか。物質的な面では、鞠を「干す」意味があったのだろう。前出の『松下十巻抄』に「鞠ほす事」という項があり、「ざうさなく木に付候てほす事わろく候。鞠箱のふたなどに入候てほし候べく候。」とされ、腰夾にもそうした用途があったと考えられる。また「ほし所、まり庭のうちは何たる所も不苦」とし、「又かい（公界）にほすとも、鞠の置やうなどさのみ有がたし。」という。干し方に特に決った作法はなかったようであるが、軒先は適当な場所なのだろう。

単に都合がよいというだけでなく、腰夾自体が華美化するように、装飾的な意味合いも考えられよう。『職人風俗絵巻』の場合に至っては、店の看板となっている。『慕帰絵』の場合、画面の町屋門前へと視野を広げると、鳥籠を持つ坊主、独楽回しに興ずる子どもたち、のぞきこむ母子（子守りと子）といった人々とともに描かれており、屋敷の主人の性格を暗示するものになる。風流な遊び人といった趣である（あるいは、和歌・連歌的な連想による含意があるのかもしれない）さらにこの段の画面全体に戻れば、路上には様々なスタイルの宗教的实践が描かれ、それらと主人公・覚如の親鸞追慕との対比が意図されているように思われる。

このように、細部にまで名前を付けるような読解を試みたくて、そこからひとまとまりの部分なり、画面全体へと立ち戻ってゆくと、図像や場面の備えていた含意の理解につながる。細部が何を描こうとしているかを確認してゆくことは、絵画作品に接する幅広い学問分野にとって有効な方法であり、『絵引』をこれからも読み込んでゆかねばならないのである。

〔付記〕

本稿は、2006年7月21日、第1班公開研究会に『『絵巻物による日本常民生活絵引』と中世史研究 『絵引』の遺産継承の観点から』と題して報告した内容の一部である。席上ご意見を頂戴した各位にこの場を借りて御礼申し上げたい。

『職人風俗絵巻』（国立歴史民俗博物館蔵・写真提供）より



図版2



図版1

『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』第5巻より



図版3

上杉本 『洛中洛外図屏風』（米沢市上杉博物館蔵・写真提供）
上京隻第三扇より